

## 京都西山地域の上部ペルム系高槻層と中部三畳系砕屑岩層について

### The Takatsuki Formation (the Upper Permian) and the Middle Triassic clastic formation in the Kyoto Nishiyama area

# 菅森 義晃[1]

# Yoshiaki Sugamori[1]

[1] 大市大・理・地球

[1] Dept. Geosci., Fac. Sci., Osaka City Univ.

大阪府北部及び京都府南西部に位置する西山地域には、丹波帯及びその構造的上位に超丹波帯構成層とされている“高槻層”が分布しており、近年、楠ほか(1998)、菅森・八尾(2004)及び菅森(2004)が本地域の中・古生界について報告している。それらの知見によれば、本地域の丹波帯の構造的最上部は三畳紀中世の珪質泥岩を含む混在相の本山寺コンプレックスからなり、三畳紀中世最後期から三畳紀新世の付加複合体と考えられている。超丹波帯とされる“高槻層”は、丹波帯本山寺コンプレックスの構造的上位に位置し、断層で接している。菅森・八尾(2004)は“高槻層”の泥岩中のノジュールから三畳紀中世放散虫が産出することから高槻層を中部三畳系としたが、菅森(2004)は4地点の珪長質凝灰岩からペルム紀新世放散虫を報告し、従来高槻層と呼ばれていた地質体が2つの年代の異なる地質体に区分される可能性を示した。

その後、筆者は菅森(2004)が報告した地点以外の高槻層の珪長質凝灰岩、珪長質凝灰質泥岩、珪質泥岩及び黒色珪長質凝灰質泥岩からペルム紀新世放散虫を見出した。また、菅森・八尾(2004)が報告した地点以外の泥岩からも三畳紀中世放散虫を得た。放散虫化石を産する両地質体の関係は岩相分布に基づいて検討した結果、高角な断層で接すると考えられる。このことから従来の“高槻層”は上部ペルム系砕屑岩層・珪長質凝灰岩からなる高槻層と中部三畳系砕屑岩層からなる広瀬層(仮称)に二分される。

高槻層は一般に砂岩泥岩互層が卓越する整然相～破断相で一部に珪長質凝灰岩及び珪質泥岩が含まれる。今回新たに4箇所の珪長質凝灰岩、2箇所の珪長質凝灰質泥岩、1箇所の珪質泥岩及び1箇所の黒色珪長質凝灰質泥岩から *Latentifistula* sp., *Gustefana* sp., *Raciditor* cf. *scalae*, *Neobaillella* sp. などのペルム紀及びペルム紀新世を示す放散虫を得た。これらのペルム紀放散虫を産出する珪長質凝灰岩は層状をなす場合、泥岩中に岩塊として含まれる場合が認められ、周囲の砂岩とは断層もしくは破砕帯を伴わずに接している。灰緑色珪長質凝灰岩に挟まれる黒色珪長質凝灰質泥岩からペルム紀新世放散虫が産出したので高槻層の砕屑岩の堆積年代はペルム紀新世と考えられる。

一方、広瀬層は最大で約600mの層厚を持ち、砂岩及び泥岩からなる。また、広瀬層は塊状の中粒～粗粒の不淘汰な砂岩を含んでおり、細粒～中粒の石質砂岩を中心とする砕屑岩層が卓越する高槻層とは岩質が異なる。このような砂岩は西方にも分布しており、中江(1988)がかつて東条層とした砕屑岩層の一部に相当するものと考えられる。また、桜井シンフォーム南翼にも同様の砂岩の分布が認められ、広瀬層に相当する可能性が高いと考えられる。今回新たに三畳紀中世放散虫が産出した地点は桜井シンフォーム(後述)の北翼に位置し、周辺には泥岩層が約40mに渡って断続的に露出している。全体の構造は層理面が認められないので不明であるが、泥岩層の分布や付近の地質を考慮すると、西北西-東南東方向の走向で、高角度で南に傾斜しているものと思われる。その泥岩層の東端に露出する泥岩から *Oertlispongia* cf. *diacanthus*, *Oertlispongia* sp., *Pseudostylosphaera* sp., *Plafkerium* sp. などの三畳紀中世 Anisian を示すと考えられる放散虫が産出した。これらの放散虫化石の示す年代は菅森・八尾(2004)の報告と調和的である。

本地域の丹波帯及び高槻層は全体として緩く西にプランジしたシンフォーム構造をなしている。このシンフォームは桜井シンフォームと呼ばれている。桜井シンフォームの北翼では南南西方向に中角度で傾斜する層理面及び劈開面が卓越し、一部に波長数百m以下の褶曲が認められる。南翼ではおおよそ北に中角度～高角度で傾斜する構造をなす。桜井シンフォーム軸部付近における高槻層は複向斜構造をなしていると考えられる。

広瀬層は桜井シンフォームの北翼に、見かけ上、高槻層に挟まれて分布し、高槻層とは高角な断層で接していると考えられる。両者の初生的な関係は今後の検討課題である。西方では広瀬層はシンフォーム構造をなす場合も認められる。

本地域の桜井シンフォーム軸部に分布する砕屑岩層の年代に関しては本研究などで解明されてきた。今後はこれらの砕屑岩層の形成場やその基盤を明らかにしていくことが超丹波帯の発達史及び丹波帯を含めた西南日本の中・古生代発達史の解明の鍵になると考えられる。